

# 姿としての「思想」

富岡幸一郎



浜崎洋介著

『福田恒存 思想のくかたち』

イロニー・演劇・言葉】

新曜社／2011年11月刊

昨年の十一月にシアターグリーンで「福田恒存誕百年記念公演」として「一族再会」と「堅壘奪取」が上演された。後者は以前に一度観る機会があつたが、今回は福田逸氏の演出で福田戯曲のなかにあるエンターテイメントの面白さが前面に引き出されていて大興味深かつた。いや、正確にいふとそれは福田恒存という批評家の根底にあるフィクションというものにたいする深い信頼である。

一九七八年生まれの氣鋭の論客による本書は、タイトルからもうかがえるように、福田の「思想」の「くかたち」をその生涯の仕事を貫くようにして描こうとした批評であるが、その「くかたち」とは別の言葉に置き換れば「生き方」である。もちろん「生き方」といつてしまえば何か意味ありげであり、その分だけ平凡で空疎な感じを与えるが、著者は福田の政治論、文学論、芸術論、人間論を様々な人物の言説と交差させながらていねいに辿り論じていく。これまでの多くの福田論は、この批評家の言葉の力に寄り添うことと、その「言葉」を切り取り、そのことでその全体像の姿を充分に捉えきれこなかったのではないか。それは保守派の「最大の論客」として論じる傾向のなかにとくに見られてきた。著者は「保守」の論客という福田像をとりわけ転換しようとしているわけでは決してないが、福田の「藝術とはなにか」や「人間・この劇的な

るもの」を改めて分析し直すことによって、その劇的「全体像」を浮きぼりにする(第二章)。望むらくはここで福田戯曲についての具体的な言及がほしいところであるが、「保守」思想家といふ冠をかぶせられて久しい福田恒存像の根本的な見直しがうながさずにはおかしい。「姿ハ似セガタク、意ハ似セ易シ」。福田の批評家としての営為は、この「似セガタ」い「姿」への意志において、「言葉の使ひ方を完成する術」(論争のすすめ)が「演劇」であると要約できる。しかしそれは小林秀雄のように、芥川龍之介の懷疑と逆説を斥け、志賀直哉の思索と行動との一致を理想とした境地へと赴き、「歴史」と「伝統」へとほぼ一直線に向かっていった「生き方」は大きく異なる。その意味で芥川のイロニーやからその批評を出発させ、「湧き出る懷疑と不信を潜り抜け、回りくどい自問自答と、煩瑣な論理的手続きを費して、戦後五年以上経てようやく「歴史」と「伝統」を信じはじめた(終章)福田恒存は、小林が究極的には捨象した「近代」との闘いを最後まで止めなかつた。その「生き方」は他者の模倣を許さない。小林秀雄のエゴーネンは少なからず存在し、今日もその曾孫のような連中が後を絶たないが、福田は決してエビゴーネンを生むことはない。その「生き方」が孕む冷徹で演劇に満ちたフィクションにて、その劇的な淵源を持つからであろう。